

令和2年1月5日(日)

明けましておめでとうございます。 その9

目出度さもちゅう位なりおらが春

この句は、小林一茶が五九歳の文政二年（一八一九年）の正月を迎えた時のものです。この句を理解するためには、まず「ちゅう位」という信濃地方から東北地方日本海側の方言を知らなければならぬと思います。この「ちゅう位」とは、あやふやとか、いい加減とか、どっちにもつかず、という意味です。しかし、それだけでは十分ではないのです。この句の前にある文を読まないで一茶がこの句に込めた真意が見えてきません。

から風の吹けばとぶ屑家はくず屋のあるべきように、門松たてず煤はかず、雪の山路の曲り形(な)りに、ことしの春もあなた任せになんむかえける

現代語訳

空っ風が吹くと飛んでいくような屑のようなあばら家に住んでいると当然だが、正月が来るからといって門松を立てるではなく、一年の煤を掃うでもなく、雪の中の山道が曲がりくねっていればその道なりに進むように、この生活なりの正月を迎え阿弥陀様にすべてをお任せして過ごす我が家である。

こんな文があって、この文の〈あなた任せ〉という意味が重要な役割を果たしているのです。ここでの〈あなた〉とは阿弥陀如来のことで、如来に全てをお任せするという意味で使われています。要するに、弥陀任せのわが身であるから、風が吹けば吹っ飛ぶようなあばら屋でもあるし、掃除もしないで、門松も立てないで、ありのままに正月を迎えており、だから、目出度いのかどうかあいまいな自分の正月であると歌っているのです。

閑話休題。

今年の正月は、まさしく、すべてをお任せしている正月となっています。9校の一つに選ばれてはいますが、とても宙ぶらりんな気持ちでおります。その決着は、1月24日までの他力にゆだねられているのです。まさしく他力本願なのであります。

この俳句の中身のように、目出度いのかどうかあいまいな自分の正月であります。阿弥陀様の力におすがりするほかはありません。